

青少年の野外教育の目的達成と日常生活の変容の関係についての考察

白木 賢信
(常葉大学)

【要旨】

本論文では、青少年の野外教育の目的達成と日常生活の変容の関係について、青少年教育施設における受入事業の事例分析を行った。分析の結果、次の①②が仮説的に得られ、これらが上述の関係の特徴の一端として捉えられる。①宿泊を伴わない事業の場合、「対自分自身の拡大」にかかわる目的達成度が高くなれば日常生活の変容も顕著となる。また「対自然・対他人の拡大」以外ではその目的達成度が高いと日常生活の変容にあつて「参加1ヶ月後の変容」と「継続参加による変容予想」の差異は無くなる。②宿泊を伴う事業の場合、「対自分自身の拡大」以外ではその目的達成度の高低に関係なく日常生活の変容が見られる。また「対自然・対他人の拡大」「対自分自身の改善」にかかわる目的達成度が高くなると日常生活の変容にあつて「参加1ヶ月後の変容」と「継続参加による変容予想」の差異は無くなる。

1. 目的

現在、自然体験活動をはじめとする各種体験活動については、中央教育審議会答申『今後の青少年の体験活動の推進について』（平成25年1月）の指摘にもあるように、体験活動の目的に沿ったプログラムや実施体制の整備等の検討が求められている。自然体験活動に教育活動としての目的性、組織性、計画性等が加わったものを野外教育と捉えれば¹⁾、目的の達成（の度合）により日常生活の変容がどのように現れるのかを掴むことも必要になろう。なぜならば、非日常生活で行われる野外教育が青少年の日常生活でどのような意味を持つのかは、野外教育にあつて重要な研究課題の1つに違いないからである²⁾。

この点について、筆者はこれまでに青少年教育施設における受入事業（以下、事業）の事例分析を重ね、その結果、日常生活への影響からみた青少年の野外教育の目的達成の特徴の一端を捉え³⁾、その上で事業の宿泊の有無により、事業参加1ヶ月後における団体参加者の日常生活の変容（以下、「参加1ヶ月後の変容」と繰り返し事業に参加することによって予想される変容（以下、「継続参加による変容予想」）に違いが生じることを提示した⁴⁾。しかし、上述の「参加1ヶ月後の変容」と「継続参加による変容予想」の違いが、野外教育の目的達成度との関係で見ればどこに存在するかは未解明のままとなっている。

そこで本論文では、上述の事例分析をさらに進めた結果を手がかりとして、青少年の野外教育の目的達成と日常生活の変容の関係について行った考察の結果を提示したい。

2. 研究方法

前述の目的に対し、今回は青少年の野外教育の目的達成と日常生活の変容の関係についての事例分析を行うが、分析の枠組およびデータについては次の(1)(2)の通りである。分析結果についての考察は、分析枠組の有効性の観点から行い、分析枠組をより精緻なものにするための課題もあわせて提示することとした。

(1) 分析枠組の設定

事例分析にあつては、既に提出した図1の枠組⁵⁾で青少年の野外教育による日常生活の変容を捉え、その上で図2の枠組による分析を行うことにした。図2は、事業を宿泊の有無に分類した上で、目的達成度を「期待以上」と「期待通り」のいずれかに分類し⁶⁾、得られた4タイプの事業について、それぞれ「参加1ヶ月後の変容」と「継続参加による変容予想」の差異の分析を行うことを示している。

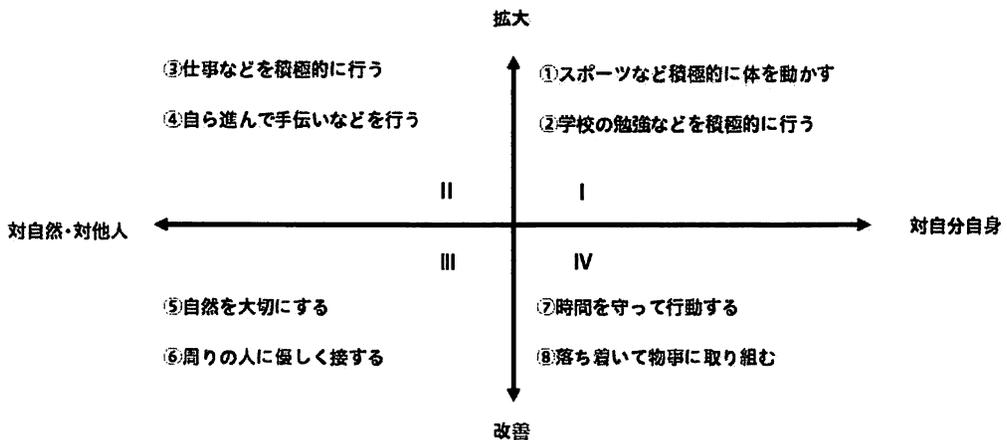


図1 青少年の野外教育による日常生活の変容を捉える枠組

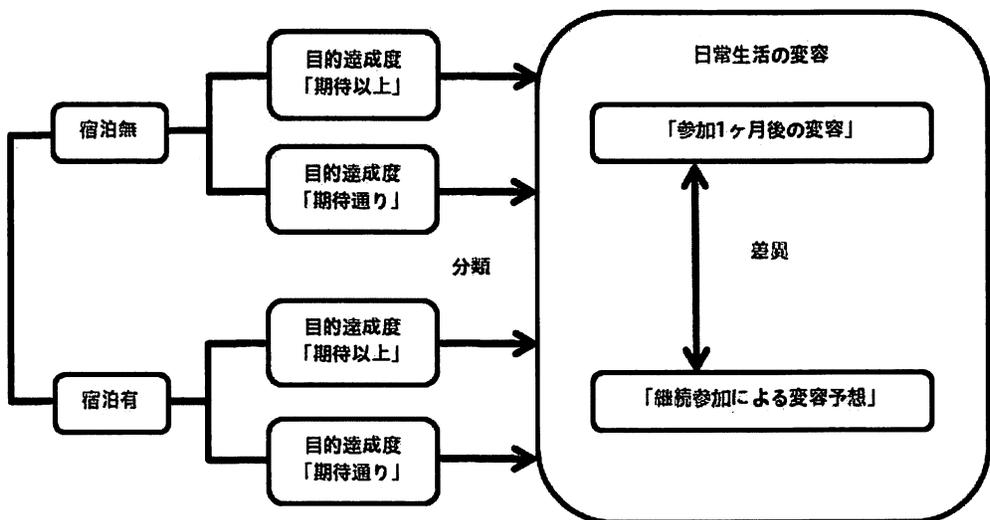


図2 青少年の野外教育の目的達成と日常生活の変容の関係についての分析枠組

(2) 分析データの収集

分析データについては、これまでの研究作業を継続するものであることから、青少年教育施設の1つである静岡県立朝霧野外活動センター（以下、センター）の受入事業に関する調査データを用いることにした⁷⁾。なお、この調査の概要は表1の通りで、データ使用についてはセンター所長からの許可を得ている。

表1 調査の概要

<p>1. 調査内容</p> <p>(1) 事業参加1ヶ月後における団体参加者の日常生活の変容(以下、参加1ヶ月後の変容)</p> <p>(2) 繰り返し事業に参加することによって予想される変容(以下、継続参加による変容予想)</p> <p>(3) 各受入事業参加団体が設定した事業目的およびその達成度(以下、目的達成度)</p> <p>(4) 受入事業期間(宿泊数)(以下、事業期間)</p> <p>(5) 受入事業参加団体の種類</p> <p>(6) 受入事業団体の主たる年齢層 他</p> <p>2. 調査対象・被調査者(サンプル)</p> <p>平成20～25年度における静岡県立朝霧野外活動センター(以下、センター)受入事業参加団体・前記受入事業参加団体担当者</p> <p>3. 調査方法</p> <p>質問紙による配付回収法で、具体的な手順は次の(1)(2)の通り。</p> <p>(1) センター担当職員が、各受入事業参加団体担当者に事業期間中に質問紙を配付</p> <p>(2) 各受入事業参加団体担当者は、事業実施後約1ヶ月の間に質問紙に回答し、回答済の質問紙をファックスにてセンターに返送</p> <p>4. サンプルの回収状況</p> <p>回収数(率)833(26.9%)・有効回収数(率)833(26.9%)</p> <p>なお、ここで算出した回収率・有効回収率は、平成20～25年度におけるセンター受入事業参加団体数(のべ3,102団体)を母数としている。</p> <p>5. 調査実施期間</p> <p>平成20年4月～平成26年3月</p>

3. 分析結果

今回は、「参加1ヶ月後の変容」および「継続参加による変容予想」をそれぞれ得点化の上、両者の平均得点の差を捉えることにするが、その得点化については、それぞれサンプルごとに図1の①～⑧の各項目についての回答「あり」を1点、「なし」を0点とした。その上で、第I～IVの4つの象限をカテゴリーとして捉え、カテゴリーごとに「参加1ヶ月後の変容」と「継続参加による変容予想」の平均得点をそれぞれ算出し、あわせて両者の得点差の分析を行った⁸⁾。表2～5は、上述の分析を図2の枠組により分類された4タイプの事業ごとに行った結果である。

表2は、宿泊無(日帰り)事業における目的達成度「期待以上」のタイプの分析結果である。IIのカテゴリーにおける「参加1ヶ月後の変容」と「継続参加による変容予想」の平均得点は「継続参加による変容予想」の方が0.33高く、有意な差となっている($t(20)=2.32, p<.05$)。一方、他の3つの象限はいずれも「継続参加による変容予想」が「参加1ヶ月後の変容」よりも高いものの、それぞれの差は0.1～0.2の間である。

表2 「参加1ヶ月後の変容」「継続参加による変容予想」平均得点および両得点の大小関係
- 宿泊無事業における目的達成度「期待以上」(n=21)の場合 -

日常生活の変容に関する項目	「参加1ヶ月後の変容」 平均得点 (標準偏差)	両得点の 大小関係	「継続参加による変容 予想」平均得点 (標準偏差)	「両得点差の 検定結果」 t値
I 対自分自身の拡大	0.71 (0.56)	< 0.14	0.86 (0.57)	0.83
II 対自然・対他人の拡大	0.05 (0.22)	< 0.33	0.38 (0.59)	2.32 *
III 対自然・対他人の改善	0.29 (0.46)	< 0.14	0.43 (0.51)	1.37
IV 対自分自身の改善	0.24 (0.44)	< 0.10	0.33 (0.58)	0.81

*p<.05

表中の数値については、原則としてそれぞれ小数第3位を四捨五入した。従って、両群の平均得点差(数値)が必ずしも一致しない場合がある。

表3は、宿泊無事業における目的達成度「期待通り」のタイプの分析結果である。これについては、いずれのカテゴリーにあっても「参加1ヶ月後の変容」よりも「継続参加による変容予想」の方が高く、いずれも有意な差となっている。

表3 「参加1ヶ月後の変容」「継続参加による変容予想」平均得点および両得点の大小関係
- 宿泊無事業における目的達成度「期待通り」(n=47)の場合 -

日常生活の変容に関する項目	「参加1ヶ月後の変容」 平均得点 (標準偏差)	両得点の 大小関係	「継続参加による変容 予想」平均得点 (標準偏差)	「両得点差の 検定結果」 t値
I 対自分自身の拡大	0.36 (0.57)	< 0.38	0.74 (0.61)	3.70 ***
II 対自然・対他人の拡大	0.19 (0.45)	< 0.21	0.40 (0.58)	3.15 **
III 対自然・対他人の改善	0.15 (0.42)	< 0.28	0.43 (0.62)	2.66 *
IV 対自分自身の改善	0.11 (0.31)	< 0.30	0.40 (0.61)	2.84 **

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

表中の数値については、原則としてそれぞれ小数第3位を四捨五入した。従って、両群の平均得点差(数値)が必ずしも一致しない場合がある。

表4は、宿泊有(1泊以上)事業における目的達成度「期待以上」のタイプの分析結果である。このタイプではⅢのカテゴリーで「継続参加による変容予想」の方が「参加1ヶ月後の変容」よりも0.26高く、有意な差であるが(t(128)=4.45, p<.001)、その他の

カテゴリーについてはいずれも両者の差が0.1未満となっている。

表4 「参加1ヶ月後の変容」「継続参加による変容予想」平均得点および両得点の大小関係
- 宿泊有事業における目的達成度「期待以上」(n=129)の場合 -

日常生活の変容に関する項目	「参加1ヶ月後の変容」 平均得点 (標準偏差)	両得点の 大小関係	「継続参加による変容 予想」平均得点 (標準偏差)	「両得点差の 検定結果」 t値
I 対自分自身の拡大	0.29 (0.45)	< 0.05	0.33 (0.52)	0.95
II 対自然・対他人の拡大	0.83 (0.63)	< 0.05	0.88 (0.66)	0.75
III 対自然・対他人の改善	0.64 (0.64)	< 0.26	0.89 (0.68)	4.45 ***
IV 対自分自身の改善	0.57 (0.58)	< 0.03	0.60 (0.59)	0.63

***p<.001

表中の数値については、原則としてそれぞれ小数第3位を四捨五入した。従って、両群の平均得点差(数値)が必ずしも一致しない場合がある。

表5は、宿泊有事業における目的達成度「期待通り」のタイプの分析結果である。このタイプについては、II、III、IVの3カテゴリーにおいて、「継続参加による変容予想」の方が「参加1ヶ月後の変容」よりも有意に高くなっている。なお、Iのカテゴリーは、今回に分析で唯一「継続参加による変容予想」よりも「参加1ヶ月後の変容」の方が高くなっているが、その差は0.01である。

表5 「参加1ヶ月後の変容」「継続参加による変容予想」平均得点および両得点の大小関係
- 宿泊有事業における目的達成度「期待通り」(n=585)の場合 -

日常生活の変容に関する項目	「参加1ヶ月後の変容」 平均得点 (標準偏差)	両得点の 大小関係	「継続参加による変容 予想」平均得点 (標準偏差)	「両得点差の 検定結果」 t値
I 対自分自身の拡大	0.21 (0.43)	> 0.01	0.20 (0.41)	0.68
II 対自然・対他人の拡大	0.71 (0.67)	< 0.24	0.95 (0.65)	8.02 ***
III 対自然・対他人の改善	0.58 (0.63)	< 0.24	0.82 (0.64)	8.06 ***
IV 対自分自身の改善	0.54 (0.58)	< 0.12	0.66 (0.55)	4.60 ***

***p<.001

表中の数値については、原則としてそれぞれ小数第3位を四捨五入した。従って、両群の平均得点差(数値)が必ずしも一致しない場合がある。

次に、前述の分析で得られた得点差についてはそれぞれ配分円形線図表⁹⁾で捉え、それを手がかりに青少年の野外教育の目的達成と日常生活の変容の関係について検討してみることにしよう。

図3は、宿泊無事業における目的達成度「期待以上」のタイプである。IIの категорияにおける「参加1ヶ月後の変容」と「継続参加による変容予想」の開きは表2の指摘通りであるが、平均得点の高低で見ると、Iのcategoryの平均得点は「参加1ヶ月後の変容」「継続参加による変容予想」とも他のcategoryよりも突出して高くなっている。これは、宿泊無事業にあつて目的達成度が期待以上であつたとき、日常にあつて自分自身の活動の幅を広げるなどの変容が参加1ヶ月後から現れる特徴を示唆している。この特徴は、宿泊を伴わない事業にあつては、参加者がこれまで経験したことのない活動に新たに挑戦的に取り組むことが多い傾向を反映しているのではないかと思われる。

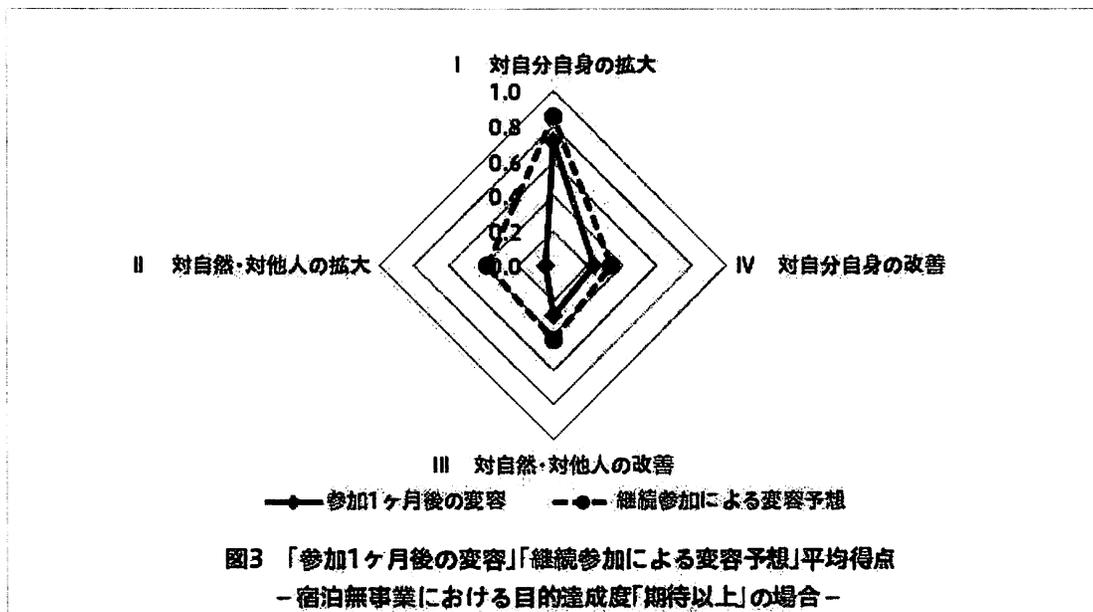


図4は宿泊無事業における目的達成度「期待通り」のタイプであるが、表3で示した通り、いずれのcategoryにあつても「参加1ヶ月後の変容」と「継続参加による変容予想」の間に開きが見られる。また、Iのcategoryの「継続参加による変容予想」については、図3と同様、他のcategoryよりも突出して高くなっている。図3との比較で述べると、目的達成度が「期待通り」の場合は、「期待以上」と違って参加1ヶ月後といった時点での変容は見られない。しかし、継続して行えばIのcategoryに関する変容が期待できると被調査者（団体担当者）は捉えていることが予想される。

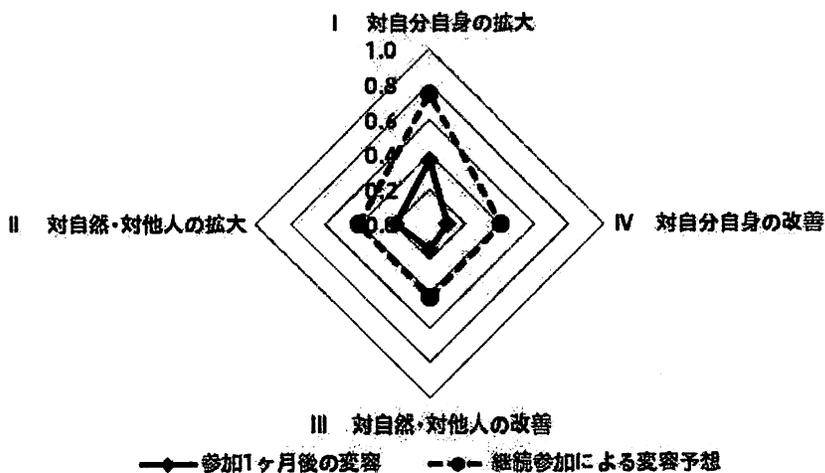


図4 「参加1ヶ月後の変容」「継続参加による変容予想」平均得点
- 宿泊無事業における目的達成度「期待通り」の場合 -

図5は、宿泊有事業における目的達成度「期待以上」のタイプである。図3および図4との比較で述べると、「参加1ヶ月後の変容」「継続参加による変容予想」とも、Iの категорияが最も低く、図3および図4とは逆の傾向となっている。「参加1ヶ月後の変容」と「継続参加による変容予想」の開きは、表4でも示したようにIIIの категорияのみに見られ、他の категорияにあっては両者の差は殆ど見られない。特に、IIの categoriaのような自然や他人にかかわる見方などの拡がりや、宿泊を伴う事業で「期待以上」の目的達成が得られたときとされているが、これは参加者がさまざまな事象に触れる機会に恵まれるといった宿泊を伴う事業の特徴の一端を示唆していると考えられる。

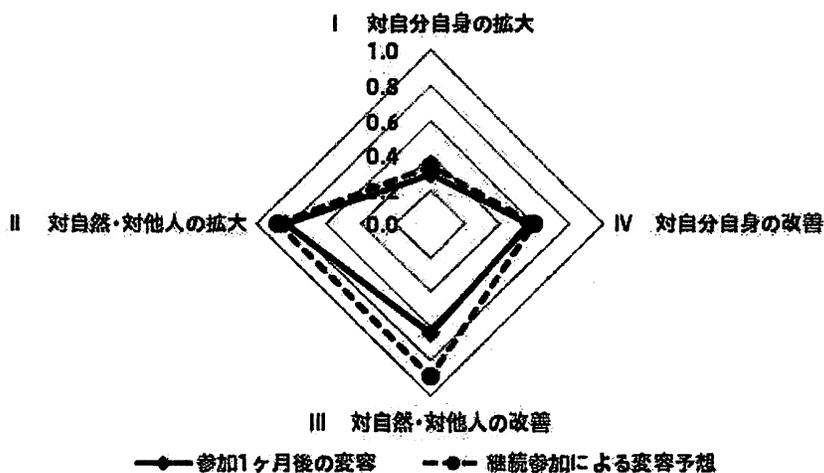


図5 「参加1ヶ月後の変容」「継続参加による変容予想」平均得点
- 宿泊有事業における目的達成度「期待以上」の場合 -

図 6 は宿泊有事業における目的達成度「期待通り」のタイプで、図 5 との比較で述べれば、図 5 ではⅡおよびⅣのカテゴリーにおける「参加 1 ヶ月後の変容」と「継続参加による変容予想」の開きは殆ど無いが、図 6 では表 5 でも指摘されているような開きとなっている。

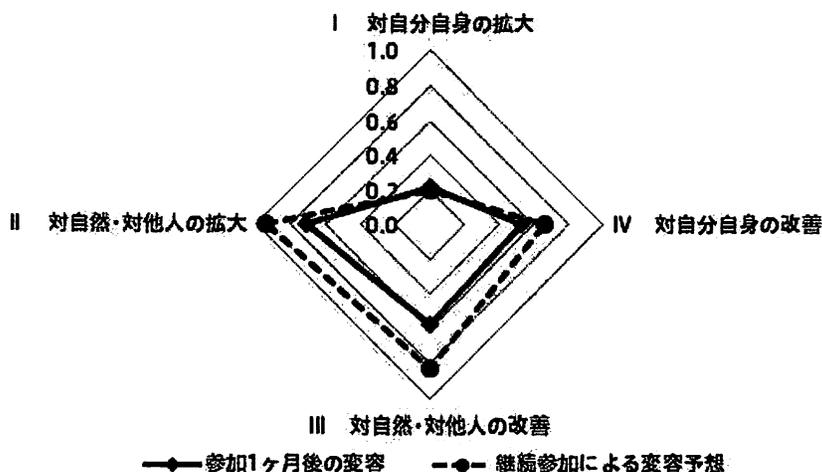


図6 「参加1ヶ月後の変容」「継続参加による変容予想」平均得点
- 宿泊有事業における目的達成度「期待通り」の場合 -

4. 考察

3.で提示した分析結果を仮説的にまとめてみると、次の①②のような内容が導かれると考えられる。

- ① 宿泊を伴わない事業にあつては、「対自分自身の拡大」のカテゴリーでは目的達成度が高いと「参加 1 ヶ月後の変容」と「継続参加による変容予想」の両者ともに高水準な変容が見られ、「対自然・対他人の拡大」以外のカテゴリーでは目的達成度が高いと両者の間に差異が無くなる。
- ② 宿泊を伴う事業にあつては、「対自分自身の拡大」以外のカテゴリーでは目的達成度の高低に関係なく「参加 1 ヶ月後の変容」と「継続参加による変容予想」の両者ともに高水準な変容が見られ、「対自然・対他人の拡大」および「対自分自身の改善」のカテゴリーでは目的達成度が高いと両者の差異が無くなる。

上述の結果があくまでも限定された事例の分析による事実発見的な内容であり、当然ながら今後さらなる検討を重ねる必要があるが、ここではこのような分析を行う意味について、今後の課題にも触れながら述べておきたい。

第 1 は、事業を宿泊の有無に分類した上で、目的達成度を「期待以上」と「期待通り」のいずれかに分類するというタイプ分けすることについてである。青少年の野外教育の目的達成と日常生活の変容の関係分析にあたり、宿泊の有無を加えた分類は野外教育に関する事業の場合には特に必要であろうが、宿泊数の多寡をどのように加えるかが今後の課題で

あろう。また、目的達成度について、注 6)でも述べたように、期待より低い目的達成度の場合についての分析を行うことが今回できなかった。しかし、期待通り目的達成できなかった場合で日常生活の変容が現れるとすれば、それはどのような特徴を持っているのかは今後解明すべき課題であろうから、サンプルの蓄積を待って追分析を行わなければならないと思われる。

第 2 は、日常生活の変容の捉え方についてである。表 1 で示したように、「参加 1 ヶ月後の変容」と「継続参加による変容予想」について、今回の分析では、各受入事業参加団体の担当者の回答データで行った。参加者個別ではなく参加者団体の次元で捉えていること、特に「継続参加による変容予想」があくまでも予想であることは、本分析にあってはデータの限界である。このような課題が依然残されているとしても、日常生活の変容をカテゴリー化した上でそれとの関連で目的達成度との分析を行うことにより、事業タイプごとの特徴が析出できる可能性があると考えられる。今回の分析を手がかりに、将来的には、目的の種類のみならず、事業プログラムを構成するさまざまな要素を含めた多角的な分析を行うことにより、青少年の野外教育に関する事業運営上の貢献となり得るような特徴解明も目指さなくてはならないであろう。

これらの課題にも急ぎ取り組みつつ、1.の目的で述べた中教審答申で言われている体験活動の目的に沿ったプログラムや実施体制の整備等にも考慮しながら、今後、野外教育による青少年の日常生活変容の特徴を解明していきたいと考えている。

注

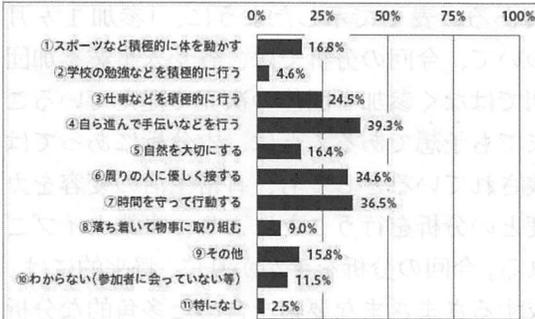
- 1) 拙稿「野外教育の分析枠組による青少年の自然体験活動遂行と自然体験蓄積の関係」(『野外教育研究(日本野外教育学会)』17(2), 平成 26 年, pp.1-14)。
- 2) 拙稿「青少年の野外教育における生活技術習得研究序説」(『教育学研究集録(筑波大学大学院博士課程教育学研究科)』21, 平成 9 年, pp.79-88)。
- 3) 拙稿「日常生活への影響からみた青少年の野外教育の目的達成の特徴」(『日本生涯教育学会論集』32, 平成 23 年, pp.103-112)。
- 4) 拙稿「青少年の野外教育の継続による日常生活への影響の分析」(『日本生涯教育学会論集』34, 平成 25 年, pp.73-82)。
- 5) 前掲論文 3)p.104 の第 2 図およびその説明を参照。野外教育による日常生活の変容については、対自然、対他者、自己の 3 つの側面にかかわる効果から言及しているものが多く、特に van der Smissen は、①自然との関係の認識の拡大・改善、②他人との関係の認識の拡大・改善、③自分自身との関係の認識の拡大・改善、を挙げている(van der Smissen, Betty 'The Dynamics of Research' van der Smissen, Betty (ed.) "Research Camping and Environmental Education (Penn State HPER Series No.11)" The Pennsylvania State University, 1975, pp.5-17 を参照)。図中の①～⑧の項目はその具体的な項目として挙げたものである。なお、ここでいう拡大とは、知識量が増えることや物の見方が広がること、あるいは新たな活動を行うことなどで、改善とは、今まで身につけていた考え方や態度が変わったり、既に身につけていた行動の仕方が変わることなどである。
- 6) 具体的な目的達成度はさまざまな度合が挙げられるが、今回は後述するデータの制約

上、2段階のみに限定した。

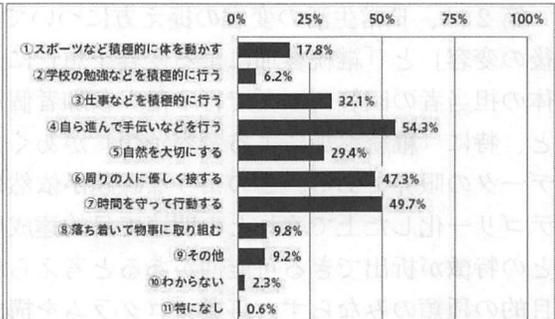
7) サンプルのプロフィールおよび基礎集計結果は付図1～6を参照。

8) 今回の分析で行った有意差検定は、対応のあるt検定によるものである。

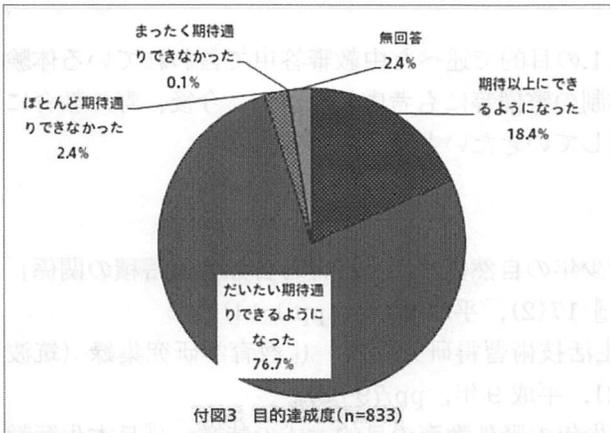
9) 佐藤甚次郎『統計図表と分布表』(古今書院, 昭和46年) pp.86-88。



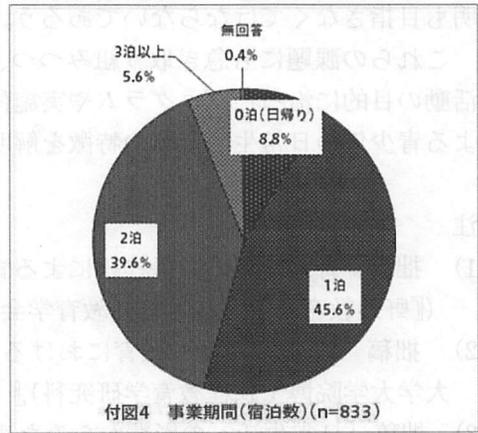
付図1 参加1ヶ月後の変容(複数回答3つまで)(n=833)



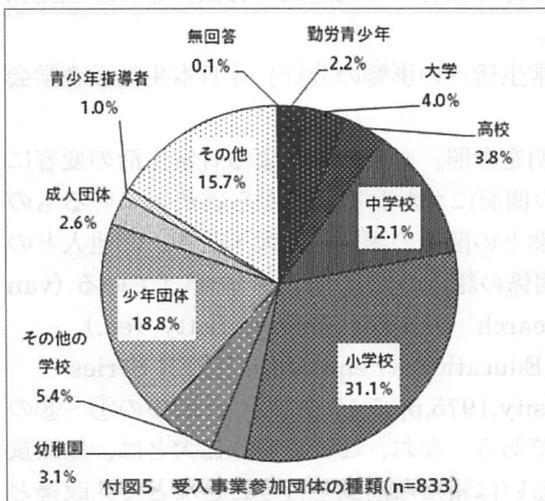
付図2 継続参加による予想変容(複数回答3つまで)(n=833)



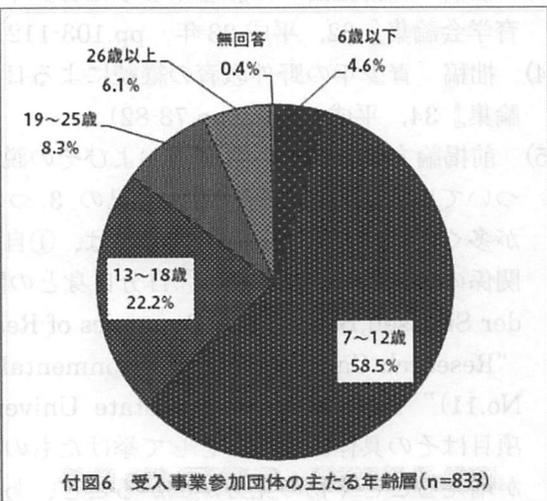
付図3 目的達成度(n=833)



付図4 事業期間(宿泊数)(n=833)



付図5 受入事業参加団体の種類(n=833)



付図6 受入事業参加団体の主たる年齢層(n=833)